



ユウトくんと空を飛びたいヒヨコ



作…中島季輝
イラスト…良元梨那

小学二年生のユウト君はトマトが苦手です。今日は飼育当番の日。ユウト君は放課後、飼育小屋に入ってた
くさんのヒヨコ達のお世話をしていました。

「眠たい……」

そう言つて目を擦るユウト君は、前の晩に遅くまでマンガを読んだしまったのです

ユウト君しそんなのを我慢して目を開けていると、一匹のヒヨコが何度も何度もツバサをパタパタと動か
しながら飛びはねていました。

何をしているのかな？ とユウト君が

ふしぎに思っていると、知らない声

が聞こえてきました。

「空を飛ぶ練習をしているんだよ」

「誰？」

ビックリしたユウト君が周りを見渡す

けど、誰もいません。

「ここだよ。ここ。君の目の前にいるよ」

さっき、ツバサをいっしょうけんめいに動かしていたヒヨコさんがユウト君の事を見つめていました。

「もしかしてヒヨコさんが話しかけているの？」

驚きながらもユウト君は目の前のヒヨコに聞きました。

「そっだよ。僕はお話が出来るヒヨコなんだ」

ユウト君の目の前にいるヒヨコさんはユウト君に胸を張って返事をしてきました。

「へえー。だけどなんでヒヨコさんはお空を飛ぶ練習をしているの？」

「それはね、空を自由に飛ぶのがボクの夢だからさ。君の夢は？」

「僕はサッカー選手になりたいー」

ユウト君は目をキラキラさせて、自信満々に答えました。

「かっこいいね。そのためにはたくさん練習しなきゃいけないね」

「うん！ たくさんボールを蹴ってうまくなる」

ユウト君はヒヨコさんに「元氣よく言いました」

「でもね。ユウト君。夢を叶えるには他にも大事な事があるんだよ」

「大事な事ってなに？」

「それはね。ご飯を好き嫌いせずにとくさん食べる事なんだ」

「どうしてそれが大事な事なの？」

ヒヨコさんに聞き返すとその理由を教えてくださいました。

「食べ物にはね。それぞれ色んな栄養が詰まっています。好き嫌いで食べると体がどんどん大きく強く大き
くなっていくなんだよ。そしたらいっぱいユウト君の大好きなサッカーの練習ができるようになるんだ。僕だっ
て毎日たくさんのご飯をユウト君からもらうでしょ？ それと同じなんだよ」

「えー、なんで？ おいしいもん。トマトとかピーマンとか」



思い出すだけでも嫌なのかユウト君は眉間にしわを寄せました。

「でもね。本当に強い体にならないよ」

「でも……」

ユウト君はどうしても好き嫌いしないで食べるのが嫌で黙り込んでしまいました。

するとヒヨコさんが言いました。

「じゃあユウト君。今から僕が空を飛べたら、ユウト君もがんばって好き嫌いせずにたくさんご飯食べてサッカーの練習をするって約束してほしいな」

「……うん。わかった！」

「それじゃ、いくよー」

ヒヨコさんは少しはれたところから走り出して何度もツバサを動かしてジャンプすると、地面すれすれだけど確かにヒヨコさんは空を飛び回ったのです。

「すごいよー。ヒヨコさん。飛んでるよー」

驚ぎと嬉しさの余りユウト君は思わず飛び跳ねました。

「がんばれば、ちゃんと出来るでしょ？ だからね、ユウト君もがんばって好き嫌いせずに食べて、大きくなったらサッカー選手になつてね」

「わかったー」

ユウト君は頷いてヒヨコさんに返事をしました。

飼育小屋のドアをコンコン、コンコンと軽く叩かれて

ユウト君はハッとしました。

「あれ？ 僕、寝ていたのかな？」

そう言いつつドアを開けると友達がいました。

「ユウト君。なかなか戻ってこなかったけど、どうしたの？」

どつやら心配して様子を見に来てくれたようでした。

「うっふん。なんでもないよ」

返事して道具の後かたづけをした後、一緒に教室に戻りました。

その日の夕食にユウト君の嫌いなトマトサラダが出て来たけど、ユウト君はがんばって自分からトマトにはしを伸ばして自分の口に入れました。

両親はそのことに驚いて、ユウト君にどうして食べるようになったか聞きました。

「今日学校でヒヨコさんと約束したんだ」

ユウト君のお母さんとお父さんは何のことかわからなかったみたいだけど、ユウト君が嫌いな物を克服してくれたのがとても嬉しそうでした。

次の日、ユウト君はヒヨコさんに嫌いなトマトを食べられた事を話しましたが、もつヒヨコさんの声は聞こえませんでした。

だけど、ヒヨコさんはユウト君の方を見て、『がんばったね。ユウト君』と微笑んでくれたように見えました。

